

「まだ悟らないのか」
マルコによる福音書 8章 14-21 節

私たちは人生の困難や不足に直面すると、強い不安から視野が狭くなる「トンネルビジョン（視野狭窄）」に陥ることがあります。目の前の問題しか見えなくなり、「ないもの」ばかりに心が支配され、これまで受けてきた多くの支えや恵みがいっさい目に入らなくなってしまう現象です。

弟子たちも、まさにこの状態にありました。湖の向こう岸へ向かう舟の中で、彼らはパンを持って来るのを忘れたことに気づきます。手元にあるのは、たった一つのパンだけでした。「パンがない」という強い不安が一瞬にして彼らの心を占領してしまったのです。

そんな弟子たちに向かって、イエスは突然「ファリサイ派のパン種とヘロデのパン種によく気をつけなさい」と警告されます。

ファリサイ派のパン種とは、数々の奇跡を目撃しながらも、さらに決定的な証拠を要求する姿に代表される、神の恵みに対して心を頑なにし、自分の基準で神を裁こうとする高慢さです。

ヘロデのパン種とは、自分の地位や経済的な安定、世俗的な評価を第一とし、目に見えるこの世の価値や人間的な解決にのみ信頼して、神の支配を信頼しない生き方です。

これら二つのパン種に共通しているのは、「神様への信頼を失わせる」ということです。私たちが日々の生活の中で不安に押しつぶされそうになるとき、これらのパン種はあつという間に心の中で膨らみ、神様を見上げる信仰の目を完全に曇らせてしまいます。

しかし、目先の不安で頭がいっぱいの弟子たちは、イエスの警告を「パンがないから叱られている」としか受け取れませんでした。イエスは彼らの頑なさや不信仰に向かって、「なぜ、パンがないことで議論しているのか。まだ、分からないのか。悟らないのか。覚えていないのか」と、矢継ぎ早に七つもの問いを投げかけられます。

これは弟子たちを突き放し、責め立てるための言葉ではありません。目の前の問題のせいで、すぐ近くにおられる主自身が見えなくなっている彼らの目を何とか開かせたいという、深い憐れみと愛に満ちた招きの言葉です。

さらにイエスは、かつて五千人、四千人を満した給食の奇跡の際、残ったパンくずを集めた籠の数を尋ねられます。弟子たちが「十二」「七つ」と答えたように、彼らは圧倒的な「恵みの分量」を自分たちの手で扱い、肌で知っていたはずでした。それなのに、目の前の不足によってそれをすっかり忘れてしまっていたのです。

人間は不安に囚われると、過去に受けてきた数々の恵みをすべて無かったことにしてしまう弱さを持っています。だからこそ主は、過去の「恵みの籠」をもう一度具体的に数え直すよう、私たちに促しておられるのです。

聖書において「パン」は、繰り返しイエス・キリストご自身を指し示すしるしとして用いられます。弟子たちは「一つしかパンがない」と不足を数えていましたが、実はその舟には、何にもまさる命のパンであるイエス自身が最初から共におられました。

私たちも人生の荒波の中で、「あれが足りない、これがない」とないものばかりを数えてしまうことがあります。しかし主の「まだ悟らないのか」という言葉は、私たちの目を主へと向け直させる愛の招きです。私たちは「一つしかパンがない」と絶望する必要はありません。私たちの人生の舟には、主イエスがすでに共におられます。足りないものを数えて恐れるのではなく、共にいてくださる主を見つめ、与えられている恵みを数える者として、この新しい一週間も歩み出しましょう。